



明治天皇の第十皇女・貞宮（さだのみや）内親王の御養育主任となった楢取素彦（前列中央）と貞宮の御付として仕えた妻・美和子（前列右）。萩博物館所蔵

う町。

三つの姓と
二つの名をもった
吉田^{しょういん}松陰の妹「^{すぎ}杉^{ふみ}文」

幕末から明治、そして現在にいたるまで、数多くの偉人・要人を輩出してきた山口県。その土壌を作ったのは、江戸時代の終わりに松下村塾で長州の若き志士たちを育て、地元ではいまだに「松陰先生」と慕われている吉田松陰であるといえるでしょう。尊王攘夷運動のリーダー・久坂玄瑞、長州を倒幕に導いた高杉晋作、明治維新の立役者・桂小五郎（木戸孝允）※、日本の初代総理大臣・伊藤博文、初代司法大臣・山田顕義など、松陰の遺志を受け継いだ若者たちが長州を明治維新の急先鋒にし、日本の近代化の牽引役となっていたのです。

あるいは楯取美和子と呼ばれる女性です。2015年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』の主人公としてにわかにその名を耳にするようになったこの女性は、地元・山口県ですら、その存在をあまり知られていなかったのではないのでしょうか。

吉田松陰の末の妹・杉文として萩に生まれ、松陰が英才と認められた久坂玄瑞の妻・久坂文となり、さらには松陰に松下村塾の後事を託された盟友・楯取素彦と再婚して楯取美和子となつて、防府で晩年を過ごした彼女。生涯でたびたび名前が変わり、いかにも時代に翻弄された人生のようですが、彼女に関する数少ない資料を紐解くと、単に運命を悲劇として受け入れただけとは思えません。優しい夫の愛を支えに家を守り、激動の時代を力強く生き抜いた女性の姿が浮かんでくるのです。

※ 桂小五郎は松下村塾の塾生ではないが、明倫館で松陰に兵学を学び、その後も門人の礼をとっていたという。



◎時代の激流を生き抜いた一人の女性。

彼女が 生きた

はぎ

ほうふ

萩・防府とい

久坂玄瑞との結婚と死別

文は吉田松陰の実家・杉家の四女、松陰の13歳年下の妹として生まれました。杉家は半土半農の貧しい家庭でしたが、苦勞に負けず陽気な母・滝や誠実で家族思いの兄・松陰の優しさや強さを受け継いで育ったことと思われます。

文がまだ幼い頃、密航に失敗して杉家預かりとなった松陰は松下村塾の主宰となり、彼の下には多くの若い志士たちが集まります。文は松陰の意向で松下村塾随一の英才と謳われた久坂玄瑞に嫁ぎました。時に文15歳、玄瑞18歳。二人はそのまま杉家で暮らしますが、幸せな日々は長くは続きませんでした。夫の玄瑞が文を残して京都・江戸に遊学、兄の松陰が安政の大獄で江戸送りとなり、刑死してしまったのでした。

松陰の遺志を継ぎ、文と離れて尊王攘夷活動のリーダーとして奔走する玄瑞は、文を

至誠の絆で 繋がる人々。

数奇な運命に負けず
力強く生きた女性の生涯



萩の松陰神社境内にある「吉田松陰幽囚ノ旧宅」。久坂玄瑞・文夫妻も短い間だがこの家に暮らした。裏手には松下村塾の建物も残っている。

気遣う手紙をたびたび送っています。しかし、兄・松陰の生き方や死を知る文は、玄瑞の身が心配でならなかったことでしょう。そんな思いも届かず、「禁門の変」で玄瑞は自刃してしまうのでした。

22歳で未亡人となった文は、これが武士の妻の定めと考えたのでしょうか。玄瑞の生前に養子に迎えた楳取素彦の次男を支え、久坂家復興のために尽くします。

楳取素彦との再婚

松陰より一つ年上の素彦は、文の姉・寿と結婚していました。つまり、久坂家の養嗣子ようしは文の甥でもありました。

松陰と素彦は盟友と呼べる間柄で、松陰が江戸送りと決まったときに松下村塾の後事を託したのが素彦でした。松陰が孟子の言葉を引用した遺言として有名な「至誠にして動かざる者は未だ之有らざる也」の書も、素彦に宛てたものだったのです。

年表

- 1843年(天保14) 文、杉家の四女として生まれる
- 1853年(嘉永6) 姉の寿が楳取素彦に嫁ぐ
- 1854年(嘉永7/安政1) 松陰、下田で密航に失敗して自首、萩に送還される
- 1855年(安政2) 松陰、杉家の幽室で「孟子」の講義を始める(松陰主宰の松下村塾の始まり)
- 1857年(安政4) 文、久坂玄瑞に嫁ぐ
- 1859年(安政6) 松陰、幕府の命令で江戸送りとなり死罪となる(享年30歳)
- 1862年(文久2) 玄瑞、桂小五郎らとともに朝廷の尊攘化を図り、幕府に攘夷実行を迫る
- 1863年(文久3) 公武合体派の薩摩・会津が手を組み、長州勢を京都から一掃(八月十八日の政変)
- 1864年(文久4/元治1) 玄瑞、禁門の変で敗れ自刃(享年25歳)
- 1868年(慶応4/明治1) 王政復古
- 1874年(明治7) 素彦、熊谷県(後の群馬県)権令(副知事)となる
- 1875年(明治8) 素彦の妻・寿が病になり、妹の文が世話をする
- 1876年(明治9) 素彦、群馬県初代県令(知事)



梶取美和子の肖像
(萩博物館所蔵)

「絹本着色吉田松陰像」(山口県文書館所蔵)の肖像部分。松陰の江戸送りが決まったときに、久坂玄瑞の提案で描かれたという。実物には松陰自身による賛が入っている。



大楽寺の墓地にある梶取素彦(右)と美和子(左)の墓



『涙袖帖』は梶取素彦がまとめた書簡集だが、こちらはその書簡を基に戦時中に書かれた文の物語。幕末維新史に詳しい周南市の古書店『マツノ書店』によって復刻された。



道の駅萩往還に立つ久坂玄瑞の銅像。

松陰の死後、久坂玄瑞までもが亡くなったときは、自分の妻の妹であり次男の養母でもある文に降り掛かった不幸に、素彦も心を痛めたことでしょう。しかし、この後、さらに意外な運命が文と素彦を待っていました。

素彦は明治になって群馬県令として活躍していましたが、寿が43歳の若さで病没。寿の看病をしていた文は、母・滝の強い勧めで素彦と再婚し、梶取美和子となったのです。美和子という名は玄瑞の没後に毛利家に仕えていたときの名に因むといわれますが、もしかすると、兄ゆずりの至誠の心で素彦と新たな人生を生きたいという決意の表れだったのかもしれませんが。美和子の境遇を慮った素彦は、美和子が大切に持っていた玄瑞からの手紙を一卷の巻物にまとめてやり、『涙袖帖』と題しました。

二人は晩年を三田尻(現在の防府市)で過ごしました。三田尻の町を見下ろす桑山山腹の大楽寺の墓地には、梶取夫妻の墓が今も静かに並んでいます。

●時代の激流を生き抜いた一人の女性。

彼女が生きた 萩・防府という町。

- 1881年(明治14) 寿、逝去(享年43歳)
- 1883年(明治16) 素彦と文、再婚。文は美和子と名を改め、梶取美和子となる
- 1884年(明治17) 素彦、群馬県令を辞して元老院議員となり東京に移る
- 1890年(明治23) 素彦、貴族院議員に当選
- 1893年(明治26) 梶取夫妻、三田尻に移る
- 1897年(明治30) 素彦、明治天皇第十皇女・貞宮内親王の御養育主任となり、美和子も御付として仕える
- 1899年(明治32) 貞宮内親王が薨去し、梶取夫妻は三田尻に戻る
- 1912年(大正1) 素彦、逝去(享年84歳)
- 1921年(大正10) 美和子、逝去(享年79歳)

※年齢は数え年です。

このまちで 生きる わたしたち。

強さ、しなやかさ。
その趣を残す、山口の街並み。

呉服町界隈は萩城の東側にある城下町で、中・下級武士や豪商が暮らしていました。古い街並みが今でも残っていて、散策を楽しむ観光客がたくさんいらっやいます。なかでも『菊屋家住宅』は萩の御用商人だった菊屋家の住宅で、邸内や美しい日本庭園を見学できます。『菊屋家住宅』の角から延びる『菊屋横町』はなまこ壁が美しく、「日本の道100選」に選定された、城下町ならではの景色が残る通りです。街のいたるところに歴史が息づいている。そんな風情のあるこの街が私は大好きです。



菊屋家住宅



●山口銀行萩支店
小橋 知世

呉服町

【萩市呉服町】

◎ごふくまち



街並みの風情が
大好きです！

菊屋横町

◎時代の激流を生き抜いた一人の女性。

彼女が生きた 萩・防府^{ほうふ}という町。

瀬戸内海・周防灘に面する防府は楯取夫妻が晩年を過ごした町。防府天満宮は、延喜4年(904年)に創建された日本最初の天神様で、維新の志士たちの信仰を集めました。素彦も千年大祭の総裁を務めるなど、天満宮に深く関わっています。参道にある茶室・芳松庵の境内には、高杉晋作ら志士たちが滞在した旅館の離れ『暁天楼』が復元され、彼らが墨で書いたといわれる戸袋が残されています。ほかに国分寺、阿弥陀寺など見どころ満載です！



●もみじ銀行防府支店
河村 沙織

歴史のまち「防府」に
お越しいただいたら
幸せです。



松崎町

◎まつざきちょう
【防府市松崎町】

防府天満宮千年大祭記念碑

※写真提供・防府市観光振興課



防府天満宮



暁天楼

国道沿いに市立図書館や県立美術館が並ぶ江向は、いわば萩の文化エリア。その一角には、水戸の弘道館、岡山の閑谷塾と並んで日本三大学府の一つと称された長州の藩校『明倫館』がありました。吉田松陰や後に杉文の2番目の夫となる楢取素彦もこの先生でした。今は明倫小学校になっていますが、明倫小の卒業生は、他県の人に羨ましがられるみたいです。暮らしの中に歴史が生活している「萩」に、ぜひお越しください。

江向

●えむかい

【萩市江向】

暮らしの中に、
歴史が生きています！

旧萩藩校明倫館 有徳館（剣術場・格闘場）

●山口銀行萩支店
井町 有紀子



平安古鍵曲

平安古は萩城の南側で、開墾が進むにつれて多くの武士が屋敷を構えた地域です。当時の街路や屋敷構えがそのまま残り、『鍵曲（かいまがり）』という、防御のために通りをわざと鍵型に曲げて見通しを悪くした城下町特有の風景を見ることもできます。この界隈には杉文の最初の夫となる久坂玄瑞の旧宅跡がありますが、屋敷は残っておらず、長州に亡命した尊王攘夷派公卿の一人・三条実美が詠んだ追悼の和歌を刻んだ大きな石碑が立っています。萩のはのびり散策できる街です。

おいしい海産物を
食べに来てください!!



●山口銀行萩支店
吉屋 睦美



平安古

●ひやこ

【萩市平安古】

久坂玄瑞旧宅跡